

記紀萬葉草木語彙の研究

堀 勝 博
Katuhoro HORI

記紀歌謡や萬葉歌には、「ヤマタツ」「アサガホ」など、さまざまな草木の名が見られるが、それらがどのような実体を表わすものであるのかがよくわからないために、歌全体の解釈も明確でない場合が少なくない。本研究は、これら上代の草木名に関する語彙的研究であり、草木名を含む歌一首にもかかわって、新たな解釈を試みようとしたものである。その方法として、和漢の本草書をはじめ、和名抄、名義抄、字鏡集等の国語資料、また庶物類纂、古今要覧稿、古事類苑等の近世近代の博物学資料など、広く文献にあたり、そこから得られた詳細な情報をもとに、また日本方言大辞典に収録された方言呼称にも注意しつつ、上代の草木名が、今のどの植物に比定されるものであるのか、またそれが歌一首の中でどのような意味をもっていたものであるのかということ、を、考証した。

偶々報告者は、関西学院大学文学部非常勤講師として、平成八年度秋学期、平成九年度春学期の一年にわたって担当した日本語学特殊講義の授業において、上代草木語彙を扱った。一年間でとりあげたのは、「かげくさ」「しだくさ」「しりくさ」「にこぐさ」「わすれぐさ」「からある」「あぢさる」「こひくさ」「しづすげ」「おもひくさ」「わさはぎ」「めざましくさ」「つばな」「ななふすげ」「あてつき」「なぎ」「うはぎ」の十七種であった。それぞれの名義について講義をすすめる上で、上記資料を大いに活用した。

今回、ここに研究成果として提出するのは、「はぎ」と「すすき」に関する「『秋芽子』考」（大阪産業大学論集人文科学編97）、および「やまたづ」に関する「『山たづの迎へ』考」（関西学院大学文学部「日本文藝研究」51-2）である。「はぎ」は、萬葉人が最も好んだ植物であり、萬葉集の用例だけで、一四一あって、実体も明らかな、何の疑問もないもののように思われるかもしれないが、子細に用例にあたってみると、検討課題が少なからず存する。「秋はぎすすき」という句をなすこと、「はぎ」を見て「をばな」を思うといった歌が存すること、「はぎ」を鹿の「花妻」ということ、「はぎ」に「芽子」の表記がとられたことなど、いづれも、一考の余地がある問題である。小稿では、そのような例歌をいくつかとりあげ、疑問点の一つひとつ明らかにしていった。また、「山たづ」は、接骨木説、女貞説の二種あり、解釈が不鮮明であったが、報告者は、接骨木説に立って、それが枕詞として、一首の中でどのような意味を担っていたのかを明らかにした。

本研究は、緒についたばかりであり、今後とも、数多く存する不可解な草木名について、考えていく所存である。